

海外拠点短期語学研修最前線

大阪大学サンフランシスコ教育研究センター長
大阪大学名誉教授

谷 本 親 伯

1. まえがき

2009年8月現在、サンフランシスコ教育研究センターでは、3種類の短期語学研修プログラムを取り扱っている。大学周辺の環境が大きく変化する中、「国際化時代への対応」と「大学の教育の質の保証」の視点から、大学における語学、特に英語教育に関して、実践に基づく所見を報告したい。

2. 工学英語（大学院生対象）

「工学英語」(Technical English) と称しているが、正しくは、「理工学系大学院生のための海外研究発表研修コース」である。その目的は、海外あるいは国際学会等の集会での英語による研究発表に際し、「分かりやすく印象深い発表」を行うためのスキルを学ばせることにある。2003年に開始し、7年度にわたって約260名が受講している。周知のごとく、理工系の研究発表に際し、国際共通言語である英語は、可能な限り、簡潔で、正確であることを旨としている。すなわち、複雑な英語表現を避け、単純に徹して、正確な英語を学ばせることにある。また、研修期間は、夏期休暇中の4週間と限定しているので、この短期間にどのような課題に焦点を当てるか、その選択がこの研修の教育効果を左右する。

過去の研修受入れ機関は、University of California at Berkeley/ UBC (2003), University of California at Santa Barbara/ UCSB (2003-2007), University of Washington/ UW (2006-2009), University of California at Santa Cruz/ UCSC (2008), University of California at Davis/ UCD (2009)のExtensionである。研修生の派遣にあたり、当該年の3月末までに、研修内容の詳細を協議し、「大学対大学」としての契約を締結する。研修成果については、研修の最後に行う「発表会」にて、1人10～15分のプレゼンテーションを行わせ、パワーポイントスライドの明瞭性・発音・説明内容・発表の速度などを確認する。加えて、発表直後に他の研修生および教師からの質疑を受け、応答

させる。発表内容は、受講生の任意選択を基本とし、多くが自分の従事する研究内容に関連した発表を行っている。

また、受講生の所属する研究科は、工学研究科・基礎工学研究科・情報科学研究科が中心であり、生命科学・情報工学・電気電子工学・機械工学・材料工学・生物/化学関連工学・環境工学の分野を専攻する者が多い。

研修当初は、英語での説明内容の理解度を確保するため、簡単な表現に対して応答させ、聞き取り(Listening)や発音(Pronunciation)が中心となる。受講生は、単語ごとの理解で戸惑っている様子が感じられるが、1週間を経過すると、語句や文体としての「単語の集合」の意味を把握してゆく。活きた英語に触れ、これを理解する姿勢が見て取れる。また、聞き取り能力が向上すると、教師とのやり取りも積極的に行うようになり、これに連れて発音もイントネーションも相手に通じるように改善される。研修の後半(2週間経過後)は、学術誌の内容理解や英作文(Technical Writing)の比重が高くなり、文章を続けて読み上げる場合の円滑度を磨くことになる。日本語と英語での表現方法の差異についても理解できるようになる。第4週は、最後に自分が行う発表の内容をまとめ、スライド作成と発表の練習を行う。同時に疑問点を教師に質問し、英語表現の適性を確認する。

研修当初と最終段階を比較すると、わずか4週間であっても多くの研修生の能力は、見違えるばかりに改善されている。流れを感じさせる英語表現を身につけてきていることが理解できる。

この「工学英語」の実施に当たっては、学生に過度の財政的負担を与えないように留意されている。研修生の所属する研究科や研究室からの各種の奨学金・補助金を利用して、負担額の減額を図る工夫を重ねている。研修生毎の個別の取り扱いをすべて同一とすることには、困難な面が残され、毎年異なるが、概ね10～100%の補助が実施されてきた。

3. 一般英語（学部生対象）

2008 年度より開設した「一般英語」(General English) は、学部生対象のプログラムである。これを始めた理由は、大学院生を対象とする「工学英語」のような専門分野での英語習得以前に、英語の基礎を学部時代に磨く機会があれば、大学院で学ぶ専門英語がさらに効果的に習得できるとみなすことにある。いわば「工学英語」だけでなく、「ビジネス英語」や「法律英語」などの専門分野を前提とする英語の学習には、すべてに共通する英語の基礎の習得が不可欠であるからである。これは当然のことであるが、総じて日本の大学生の英語力が国際比較の中で、相当低いという事実から考えれば、大学の英語教育においても教育の質向上を徹底させることが不可避である。

プログラムの内容については「一般英語」の性質から、各種の語学研修機関が提供する既成のプログラムを利用することになる。ただし、研修期間中、定期的に（例えば週に 1 ～ 2 回）、研修の参観を行い、参観者が明らかに「自大学の学生に対する研修内容・方法としては不適切」と判断した場合は、研修内容・方法に注文をつけるようにしている。2008 年度の場合は開始当初に、参観者（当センター 2 名）が不適切な点をいくつか指摘し、改善を要求して、これが認められた。大学が関与して語学研修を世話する限り、引受機関や担当教師に抵抗感があっても、改善に対する根拠を示して、これを求めることは当然のことと考える。

実際に参観を重ねているうちに、いくつかの問題を感じる。研修を授受する両者に起因する。その背景には、日本からの研修生が日本での慣習と現地環境の理解不足から、なかなか自分の意思を伝えられない、すなわち、Yes/No を明瞭に答えられず、また教師の方も当初のクラス配属のための評価において、全体に過少評価を下して研修に入る傾向が認められる。研修の準備段階で、より適切な情報交換が求められる。したがって、既成のプログラムを利用する場合は、研修希望者の事前評価を行った上で、派遣することが望ましい。本学での英語担当教師の負担が増えるが、大学生の英語力向上のためには必要な対応であろう。

この「一般英語」研修参加者の実体は、ほとんどが学部 1, 2 年生である。数か月前には、高校生であったり、受験のために努力した英語学習の気運が濃く残されていることと同時に、大学入学により大きく目を開いた時機でもあり、海外での英語研修に新鮮な意欲

を示している点の特筆したい。2008 年は初年度でもあり、サンフランシスコセンター側でも可能な限り、頻繁に授業参観を行い、休日にも周辺大学のキャンパスツアーに案内するなど尽力した。研修生がグループとして、よくまとまっていたこともあり、研修後においても連絡が続いたことは、いい評価を得た証とみなしている。

今年の研修は未了であり、研修引受機関からの評価や研修生からの研修レポートも未確認であり、現時点ではコメントすることができない。全体の印象としては昨年に比べ、語学研修だけではなく、米国の文化や風土に触れたいとする学生が増え、行動に多様化が認められた。逆に言うと、語学研修に対する意欲や集中度の低いものが認められた。要は、「4 週間」という限定された時間の利用の仕方にある。

4. 歯学英語

「歯学英語」(Dental English) は、本年度（2009 年度）に新設したもので、正式には「米国歯科英語研修プログラム」である。大学院 2・3 年生及び研修医の中から、積極的な意欲を最重要視して選択された 10 名（内、女性 4 名）が受講した。専門分野が明瞭であり、工学英語での経験を活用して、受け入れ機関候補先の詳細調査を行った結果、5 つの候補の中から、Monterey Institute for International Studies (MIIS) を選んだ。理由は、英語研修については「全米一」の定評を受けていることにある。過去においても語学研修先の候補の一つであったが、質の高い研修を提供するため、研修費用もそれだけ高額であった。（語学研修の準備においては、費用の抑制が常に目的と相反する課題である。）

研修の主目的は、「診療時の医師と患者との円滑な会話」および「研究発表スキル習得」の二つである。MIIS には多彩な教師が控え、今回の研修には、熟練教師 2 名（男性・女性）が担当した。研修初日から、ごく普通の速さで話し、これに対して、研修生の理解を確認し、語彙の増加と円滑な発音を訓練することから始まった。教材は、医療関係の新聞やジャーナルの記事から抽出されたものである。モンレーでの 3 週間という短期の研修期間中にできるだけ多くの、一般では使用されない医科歯科分野の専門用語を研修に含ませたいとする意図があった。担当教師が事前に、モンレー地区の歯科医師会や数名の歯科医と相談し、

専門用語やジャーナルの紹介を受けて教材を選んでいる。

基本的な能力である「聞き取り」(Listening)、「朗読」(Reading)、「口頭表現」(Speaking)、「英作文」(Composition)について、随所に説明と確認が入る。参観者である筆者には、「定性的・定量的表現」と「自分なりの表現」が求められているように感じられた。教師が教材を使って説明する時間と、2～3名の小グループに分けグループで考える時間とが交互に配置されていた。

初日の午後、徒歩で行ける距離にある歯科クリニックを訪問し、米国の診療所の内部を見学、診療に使用される検査装置などについても詳しい説明を受けている。研修生は全員、歯科医免許を取得し診療行為の経験があり、患者の反応や検査装置の細部にまで及び質問を行っている。説明する歯科医の予測を越えた研修生の質問の鋭さに対し、付き添う者には力強く感じられたことを付記したい。MISSでの教育方法は、3週間ほぼ同様に継続され、時折複雑で難しい言葉に対し、「どのような意味か？」を問いかけ、グループで考えさせた上で、解説することも見受けられた。これらの繰り返し、英語での応答時間を短くさせている。

筆者は、英語教育の専門家ではなく、土木工学の分野で教鞭をとって来て、60代の半ばにして「品格のある英語を使いたい」と願う修行の身であるが、立場的に浅学非才を顧みず、敢えて評価すれば、「原理原則から出発する日本の教育」と「つねに具体的な課題から、個々の考え方を展開させる米国流教育」の対比がみられたと言えよう。

3週間の語学集中研修は短い。各自10分のプレゼンテーションの時間はすぐに到来した。ユニークと感じたのは、1名の発表者につき、同じMISSにて国際関係を専攻する英語の堪能な学生3名を配置し、発表直後に細かく評価させ、本人の改善点を具体的に指摘させたことである。「教師対学生」の目線ではなく、同年齢で第三者としての聴衆の目からどのように理解されたかを伝えさせている。10名の研修生は、「日米の生活に対する姿勢」や「歯磨きと食生活」、「歯科医としてみたブラッシングの相違点」、「ホームステイでの生活」など、直接体験に基づく知見を発表した。3週間という短期間の成果として捉えるならば、全員所期の目的を十分に達成したと思える見事な発表であった。

歯学英语は、これで終わっていない。さらに、有意

義な研修が第4週目に準備されていた。すなわち、MISSでの研修は、英語そのものを習得するものであったのに対し、カリフォルニア大学サンフランシスコ校(UCSF)の講義の一部やインターンシップなど専門教育に関するものである。午前中3時間は、当センターの会議室で講義と質疑応答に費やし、その後、場合により昼食時間にも食い込んで、コーディネータ(Dr. John Ino)の用語解説があった。そして午後は、市中の歯科クリニック4か所に分散して、診療現場を視察後、診察医を交えて、実際に医師と患者の間で交わされた会話の不明瞭な部分や重要性について、付加的解説と討議を重ねたことにも研修の濃度が感じられる。

午前中の講義は、UCSF歯学部教授5名によるもので、①「歯学における重要用語の解説と米国における概況」(Dr. John Ino)、②「感染制御」(Dr. Molly Newlon)、③「再生保存歯学」(Dr. Grant Tsuji)、④「歯周病」(Dr. Mark Ryder)、⑤「レジン治療」(Dr. Mike Staninec)であった。このような講義を介したUCSFの教授陣との接触だけでなく、看護学科の学生を含む歯学部学生との交流会も催された。さらに特筆すべきことは、カリフォルニア歯科医師学会(California Dental Association/CDA)がサンフランシスコにて開催中であり、学生特別登録制の特典を受け、9月11日(金)11:00から5時間にわたり、学会場および展示場(材料・測定機材をはじめ歯学・医療にかかわる製品)を視察する機会が与えられたことである。UCSF関係者の支援がなければ、ここまでの内容に至っていなかったであろう。

5. 語学学習の意義

ここに述べる短期語学研修の今年度の開始直前に、G30への対応と採択があった。一方、当地近郊の主要な大学での留学生の占める割合は、30%以上というのが普通である。大学院になるとさらに高くなる。日本の大学においても、留学生を特別視することなく、英語を共通言語とする学生の比率が急激に増加するという事態を直視すれば、コミュニケーションを英語で行わなければならない状況が増加していることは論を待たない。少なくとも理工医系の分野では、英語を介した授業・研究討論・情報交換は、日常行為として取り扱う準備が不可欠である。

また「多様化の時代の大学教育」として、すなわち「国際化の中の大学教育」として、「カリキュラムの中

に何のためにこの教科が存在するか、そして、どのように機能させるか」という問に答えるためには、大学における「知の創造・伝達・周知」の基礎としての英語基礎教育を見直すことが不可欠と考える。「大学全体としての英語の能力は、自分たちの意識よりもはるかに低い」という指摘に対して、読者はどのように反論されるか。

1999 年以来、EU を中心に展開される教育改革（Bologna Process）が、現在、米国の教育界にも「飛び火」し、この数年、急激に早急な対応が求められていることも知られている。学生の可動性の高い、国際化された大学の条件として「短期留学（学期単位）の制度化」、すなわち、「単位互換制の確立」と「共通言語（英語）での授業の授受」が基本となってきた情勢の中では、日本の大学生の英語教育、あるいは大学に至るまでの語学教育のプロセスがもう一度、根本から見直されなければならないと痛感する。

今回、この紙面で報告した短期語学研修は、大阪大学が他大学に先駆けて実施するもので、すでに多くの知見が蓄積されている。多くの学部・研究科において、一般英語以外にも専門分野ごとに、大阪大学の意志が反映された語学研修プログラムが増えることを祈る。

6. 結言

英語圏で直接、語学研修の機会を与えられる学生数は、全学学生の 0.3% 以下である。せめて、この比率が数% になるような工夫と、このような研修から得られた知見を全学の学生教育にフィードバックできるような受け皿が望まれる。現地研修者をパイロットにし、大学での英語教育の焦点をより明確にして、大阪大学をさらに国際化していくように励みたい。

（学界）

❖❖❖ 年会費納入はお早めに !! ❖❖❖

平素は、会費納入にご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

年会費会員の皆様には毎年テクノネット 4 月号に、郵便局の『払込取扱票』を同封しておりますが、未納の皆様にはテクノネット送付の都度『払込取扱票』を同封することとなりますので、コスト削減の観点からもできるだけ早い時期に納入いただきますようご協力をお願い申し上げます。

また、2 年間で会費の納入がない場合は、会費規定により、会誌の送付を停止させていただきますのでご注意ください。